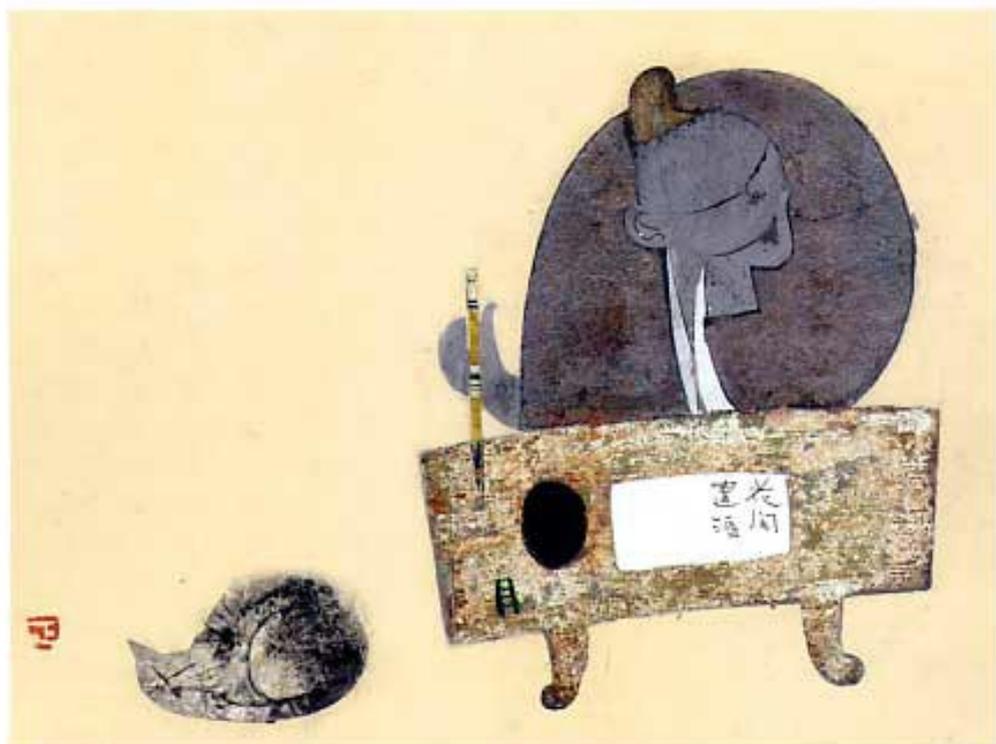


火星



平成20年7月号

七曜抄 (五)

山尾玉藻

夏萩にきのふとちがふけふの雨

梅雨深みける灯の下のサラダバ

浅沓の踏みし夏草けぶりけり

浅沓の草にすべりし川祓

白丁の胸のまづしき松の風

昼酒の足らざる貌や行々子

暮ことしの老いを曳き歩む

夏負けてメロン正しく切り分くる

夏負けの吾が身より出る大阪弁

太白星

柳生千枝子

地に棲める虫たち春をささやくか
春の雲掩ひ来てより陽の消さる
夕日消ゆ春星ひかり始めたり
新緑へ出てより瞳めざめたり
新緑や眼を洗はる風の来て
新緑を来て幼な児の輝く眼
天よりの光^リ新樹の森を出て

杉浦典子

かげろふへ二輛増結されにけり
木洩れ日をかきまはしめる熊ん蜂

春落葉の嵩踏めば息吐きにけり
木の洞に二礼二拍手しておぼろ
花の昼黒衣に影のありにけり
囀や大夫にこゑの休みの日
袋角に触れし指先ぬれゐたり

浜口高子

酒糟を焼いてゐる香や花の雨
舟莫蔭のしめりに坐せり桜の夜
夜桜の宙を電線つらぬけり
田に水の張られし風に影生る
ひらがなの町に浴びたる柳絮かな
麦穂波の向う日本海の紺
箱庭の道のつづきに星出でし

火星作品

山尾玉藻選

たんぽぽの全き絮のしづかなり
花筏よりひとひらの急ぎけり
病む妻に客の久しき桜草
苜蓿老人にある水の音
辛夷咲くまだ表札のなき新居
春の昼空の柩をのぞきたる
竹林を靄立ちのぼる仏生会
けふ掘りし筍山に春の月
花ミモザ大きな風の来りけり
蜥蜴出て飛鳥の石を抱へたる
春雨の本流に乗る棧俵
分水嶺を因幡の春へ越えにけり
流すまで傘きせかける雛流し

豊中 廣畑 忠明
明石 戸栗 末廣
宝塚 山本 耀子

壬生念佛かひなに齡ありにけり
 炮烙のこなごなに春闌けにけり
 看護士のささやいて消す春灯
 乙訓や水の上の茶屋春灯す
 クレソン咲く中州へ水の逸りけり
 醍醐寺の花もしまひの雨廂
 一棟の毀たれ始む大桜
 百歳の母訪ふ花の盛りかな
 おほかたは峪に迫り出し桜宿
 み吉野や桜の宿の細柱
 海崎や湖へ撓むる大桜
 すかんぽを手折りて五欲さみしめり
 洛中の昏がりに買ふ螢鳥賊
 河内野の土塀奥より春の水
 ひたすらに燕とぶ日や忌を修す
 宝籤二まい持ちゆく日永かな
 会うてすぐ腕をくみけり新樹の夜

宝塚河崎尚子
 神戸深澤鱈
 八幡奥田順子

選のあとに

山尾 玉藻

たんぽぽの全き絮のしづかなり

廣畑 忠明

一句仕立ての素晴らしさは断定にあるが、掲句における「全き絮のしづかなり」の断定も、「たんぽぽの絮」の実相を確かに捉えていて揺るぎがない。同時発表作「病む妻に客の久しき桜草」では真骨頂を発揮、この作者ならではの滋味に溢れたものとなっている。

竹林を靄立ちのぼる仏生会

戸栗 末廣

夜来雨が上がったのか、それとも昨夜は冷えこんだのか、日が上るに従って「竹林」から靄が濃く立ちのぼり始めたのである。その穏やかな景に誘われ、今日が「仏生会」であることを思う作者のころの流れを、読み手もごく自然に受け入れられる。静かな描写に豊かな诗情がある。

壬生念佛かひなに齢ありにけり

山本 耀子

壬生念佛は壬生の町衆の男性が全てとりおこなう行事である。男性役も女性役も、いずれの演者の袖口からも太い腕がよつきり伸びていて、その無骨さが却って温かくて優しい。作者もそんな腕を興味深く眺めていたのであろうが、ふとそ

の腕がそう若くはないことを見てとったのである。いかにも「壬生狂言」らしい、現場ならではの発見がある。

介護士のささやいて消す春灯

河崎 尚子

一目瞭然、解説を必要としない句である。敢えて附言するなら、「春灯」が消された後の作者の深い思いを、十七文字以外から読み取るべきであろう。

すかんぼを手折りに五欲さみしめり

深澤 鱧

「五欲さみしめり」とは全くの直叙である。しかし、その感情を誘い出したのが「すかんぼ」であつたところに、素直に共感を覚える。「すかんぼ」を折ると懐かしく温かな音を立てる。その音が思いがけず作者を無垢だった幼い頃にタイムスリップさせたのである。直載的感情に街いを感じさせないのは、「すかんぼ」の働き以外のなものでもない。

洛中の昏がりに買ふ螢烏賊

奥田 順子

京都の商家の構えは間口が狭く奥行が深い。掲句は錦市場か或いは市街の商店の景であろう。いずれにしても、「洛中の昏がり」に、京都特有の古色漂うほの暗さが実感される。そんな「昏がり」でごく庶民的な「螢烏賊」を買うところにちよつとした面白さがあり、更には「螢烏賊」の放つ濡れ色が一層冷たく感じられてくる。

(以下略)

同人 I

恒星圈

加藤 君子

彼岸鳩顔見知りやも傍に来る
雨しとど句は苦に非ず春なれば
豆の花暦うつりしけだるさに
花あとのあれよあれよと桃咲けり
ど忘れと思ひ諾ひうらけし

長田 瞳子

金澤 明子

踊好きの傘寿を悼む
くわんおんの掌の踊り花舞ひはじむ
子らの声シートにころげ花の下
老猫の爪の研ぎあと柿若葉
ボール追ふ少年の声けし坊主
かはほりや自転車ふたつ凭せあり

合格に白木蓮の透きにけり
花に明け花に暮るるよ万愚節
花陰に十三詣の父子在り
チューリップ一輪挿せる夜の黙
露受けて頬ふつくらとチューリップ

加古みちよ

河崎 尚子

雛流す稚児の袂の濡れさうな
流れゆく雛見届けよ笙の笛
流れゆく雛にほどよき水の嵩
笙の音の雛の橋渡り来る雛館
忘れもの雛の里より届きけり

寝ころんで草笛を吹く草の中
かいつぶり潜りしままや花筏
花守の幹に掌を当てつばやける
鳳凰堂出て花びらの向ひ風
外堀は菜花の川へつづきけり

獅子座

山尾玉藻推薦

垣岡暎子

目つむりてふくるる鳩や花の雨
棧橋にぐらりと着きぬ花見舟
夕朧たれかすべりし草の跡
水音に花びらはづる白木蓮

奥田順子

花の夜をまはりすぎたりオルゴール
舳ひ綱ゆるびてゐたる花の影
早立ちの素顔ありけり花の門
奥飛驒の花の舞ひ込む山葵沢

岩井ひろこ

山桜墨たつぷりの書簡なる
しんがりは透明の傘花辛夷
青葉若葉桃源郷に風のひだ
夕時の影の重なる潮干潟

前田忍

法螺貝に桜散りたる蔵王堂
朧夜の歩幅の違ふ下駄の音
春光を裏返しゆく耕運機
花房の空也の息に冷えぬたり

渡邊美保

連翹の黄明りに島雨となる
鎌を手に長靴の来る花の川
花三分首に巻きたるタイシルク
朧夜のハーフムーンといふ酒場

重見久子

葉桜の奥に蹄の駆けし音
鉄扉より靴跡つづく春の泥
春日傘をちよつと追ひけり烏骨鶏
片寄せてある革靴へ春の波

竹内水穂

口紅の赤より紅しチューリップ
花びらのはりついてゐる父の墓
拘置所に面会日あり花こぶし
米を研ぐ素足なりけりさくらどき